

『Haiku of the Present』（サントシュ・クマール、ロチャック出版、インド、2011年）コメント

会津太郎

インドの詩人、サントシュ・クマールは、序文の中で次のように言っている。「この俳句の本を書きながら、私達は575の音節にこだわるべきではないと思った。」実際に彼は秀句として夏石番矢の無季で575にこだわらない俳句を引用している。彼の俳句を書く姿勢は、季語や575の音節にこだわらない自由な姿勢である。それでは彼の俳句作品を実際に読んでみよう。句集のまず最初の作品。

Prince of Austria assassinated(8 syllables)

Furies take revenge(5 syllables)

First World War(3 syllables)

オーストリア王子暗殺
怒りと復讐
第一次世界大戦

これは第1次世界大戦を引き起こしたサラエボ事件が3行で書かれているだけであり、特に季語もなければ575のリズムもない。しかし俳句の性質である省略は効いている。

1行目のAustriaの後にisが省略されているし、3行目のFirstの前にはtheが省略されている。また作品の主題は日本の俳句のような自然の美しさではなく、戦争、人種差別、核兵器など人間の対立である。クマールは現代社会や現代文明のいろいろな厳しい面を取り上げ、それを3行の俳句で絶望的に暗く表現している。

Nuclear weapon industry

The cruel system

To annihilate earth

原子力兵器産業
地球を破壊するための
残酷な仕組み

しかし彼は現代社会に対し、まだ希望を捨ててはいない。

岸から岸へと
主の王国に
春のミツバチが囁いている

Shore to shore
lord's kingdom
vernal bees murmur here

クマールにとってこの世は、春のミツバチが岸から岸へ囁くように飛んでいる神の王国であるかのような瞬間がある。彼は瞑想によって救いを求め、その救済を求める精神の軌跡を三行の俳句に表現する。その表現内容は、花鳥諷詠を重んじる日本の伝統俳句とは全く異なり、パスカルの『パンセ』のように、

キリスト教的な救済を求める箴言に似ている。

イエスの	Jesus message
私達への伝言	Acts upon us;
新しい人の誕生	New person born

詩人クマールは、私たち人間はキリスト教を通して再び生まれ復活することができるという信仰を私たち読者に伝えていく。彼は序文の中でも言っている。「この俳句集を書きながら、私はしばしば神と対話している。」しかしながら彼は救済の方法として、禅の瞑想を実践していた。そしてその禅的な瞑想の結果を俳句の中に表現する。この禅において、インドの詩人クマールは日本の芭蕉と似ている。だが、芭蕉が禅の瞑想を具体的に表現したのに対し、クマールは抽象的に観念的に表現した。

座禅とは座る瞑想	Zazen-seated meditation
禅道とは歩く瞑想	Zendo-walking meditation
三行目で結び合う	United in third line

彼は序文の中で書いている。「この俳句集に含まれている俳句は、禅の瞑想に影響されている。座禅つまり座って行う瞑想は、救いへ辿り着くために、絶対に必要なのだ。」上の俳句は、彼の俳句が三行で書かれた禅の瞑想であることを意味している。そしてその3行目は救いという余韻を彼に与えるのだ。最初、この俳句集は現代の人間の対立や苦悩を表現していたが、だんだんと禅の瞑想によるキリスト教的な救済へと変わっていく。

俳句とは	Haiku is
この世とあの世への	pilgrimage to world
巡礼の旅	and underworld.

結局、クマールにとって俳句とは、禅の瞑想によって救済を求める三行の箴言詩である。